100枚の日誌的バウム描画に関する考察：バウムの描画体験の内観を通じて

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2019-02-28
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 奥田, 亮
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4356

100 枚の日誌的バウム描画に関する考察
―バウムの描画体験の内観を通じて―

学芸学部　心理学科　奥田　　亮

要旨：本研究は、１日１枚合計 100 枚のバウムを筆者自ら描き、バウムと毎回の描画体験等を記録した内容を検討して、バウムの描画体験研究の基礎資料を提供することを目的とした探索的研究である。100 枚のバウム画および関連する記録を検討した結果、労力をかけない典型的なバウムとして簡略画や小さなバウムが出現すること、また描画表現上の課題やテーマとして、枝の分化、樹皮（幹の模様）、根元の処理・表現、遠景化・情景化、地平線の位置、が見られたことについて論じた。そして、これらのバウムにおいて生じる描画体験の内観や心理的テーマ、日常との関連性について考察した。最後に100 枚の中から３つのバウムを取り上げ、分枝させること、樹冠部から描くこと、バウムが現状の感覚を反映すること、について考察を行った。これらは一個人の主観的な描画体験の内観であるため、一般化させることは難しいが、描画体験過程を理解する上での視点を提供するものとして役立つと考えられる。

キーワード：バウムテスト、描画体験、日誌、内観法、探索的研究

問題と目的

バウムテストは、A4 の白紙に実のなる木を描く投映描画法であり、日本では基本的に心理アセスメントのための一技法として広く用いられている。

バウムテストを通じて描画者の内面を理解する際には、サインアプローチや発達的視点の活用など、様々な切り口があるが、筆者は描画体験過程を考えることを重視している。すなわち、バウムテストによって描かれた樹木（以下、バウムと呼ぶ）がどのように描かれたか（例えばはじめにどの部位から描いたか、等）という描画のプロセスや、そこに含まれ得る心理的体験について思い巡らすようにしている。

また、バウムの特徴を捉える上で、多くのバウムを見ることが重要であり、Koch（1957/2010）も、バウムを理解するためにまず「たくさんのバウムの絵を静かに眺め」る、ということを述べている。描かれたバウムが大きく描かれたのか、やや小ぶりなのか、といった判断は、多くのバウムを見て相対的な比較ができることによって可能となる。

ただ、多数のバウムを見て、そのバウムが描かれたプロセスを知り、そこから様々なバウムを理解しようとしても、実際に自分自身でバウムを描く体験や、その体験を内省する行為がなければ、バウムを描画過程からありありと追体験的に理解することは難しいであろう。心理査定技法に習熟する上で、その技法を自ら被検者として体験することの意義は大きいし、様々な大学・大学院の授業でも、ある査定法について学ぶときには、まず自らが被検者となってその査定法を体験することから始める。バウムテストであれば、まず自分自身がバウムを描いてみることである。

ただし、ある査定法の１回の個人的な体験が、その個人内で恒常的に生じるものと言えるかは不明である。バウムを描くことは、描き手にいつでも同じ体験をもたらすのであろうか。異なる形態のバウムを描く場合には、おそらく異なる体験が起こっていると推測されるが、しかし一方で変わらない（バウムを描く中で、繰り返される）体験があるのかもしれない。

このような問題意識を持つとともに、筆者はバウムテストの研究の方法として、“何枚もバウムを描くことでバウムについて理解されてくる面があるのではないだろうか”、と着想するに到った。

そこで本研究は、探索的研究として、筆者自らバウムを描く体験を繰り返すことを試み、様々なバウムを描く中で、各々の描画体験がどのようなものであるかを記述することにした。そして、何らかの変化や共通点、その他継続的に（基本的に毎日１枚）バウムを描くことによる気付きや、描かれたバウムと日常との関連性について、調べることにした。バウムの描画過程を専門的に研究している立場で、日々描くバウムの体験を内省することは、多数の被検者を募ってバウムの

描画体験についてインタビューするといった研究で得られる情報に比べ、一定の深さをもって詳述された報告を得ることができるメリットがある。一方で研究の欠点として、内省された内容が一個人の主観に偏り一般化し難い、という点が挙げられる。それゆえバウム描画体験研究の基礎資料を提供することを目的とするpilot studyとして、本紀要における研究ノートの形式をとって、報告することにした[注1)]。

方法

実施期間　2010年10月～2011年2月

手続き　基本的に夜（就寝前）に、次の手順でバウムの描画とそれに関連する情報の記録を行った。

①バウムの描画：『実のなる木を一本』描いた。②描画体験の内観・バウムイメージの記述：描いたプロセスを振り返り（描画順、描画体験・感覚、連想等）、描いたバウムに関わるイメージ（生えている場所や何の木か等）があれば、それも記した。③日常の情報や気分：その日一日を振り返って『どのような日だったか』『今の気分（情緒状態）』等をごく簡潔に記した。（②③の情報を本文では「　」で引用する。）

材料として2Bの鉛筆とA4白紙ノートを用い、見開きの右側にバウムを描き、左側に文字情報（②・③）を記した（図1）。

これを日誌的におおよそ毎日、合計100枚描くまで継続して実施した。（ただし個人的事情で実施できない日もあったため、終了まで124日を要した）。

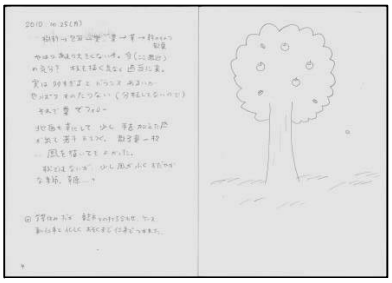


図1　バウムと関連情報を記したノート

結果と考察

まず、描かれた100枚のバウムを論文末に資料として示す（資料1～5）[注2)]。そして、100枚のバウムと手続き②・③で記された内容から気づいた点を以下に述べていく。

1）典型的なバウム

毎回その日に描きたいと思ったバウムを描いたため、描かれた100枚のバウムはかなり多様であった。医療機関などで患者に定期的にバウムテストを施行すると、類似したバウムが長年に亘り繰り返し描かれることも少なくない（例えば加藤・丸井、2011）が、今回はほぼ毎日の描画であったため、前日とは異なるバウムを描こうという動機が影響したと考えられる。

それでも、100枚の中で典型的あるいは類似したパターンで描かれるバウムが散見されるので、まずはそれらを取り上げてみる。

①簡略画

#18（図2）、#26、#36、#42、#48、#87、#96等は、いわゆる漫画風の簡略化されたバウムで、形態が比較的類似している。すなわち幹は空白で平行幹気味であり、枝は扇状に分化している。根元はほとんどが短く広がっているか、地面の線で区切られている。他の要素（葉や幹の模様、等）はほぼ描かれていない。

図2　Baum#18

これらのバウムを描いた時の内観や気持ちの記述からは、#36「ぞんざいに描いた」、#42「もう早く寝たい」、#87「気合入っていない」、#96「めんどくさい」等、描画へのモチベーションが低く、適当に描こうとした様子が伺えるが、興味深いことに枝を比較的伸長させている#18（図2）、#26、#48のバウムでは「何も考えずスッと描ける」「気分的には平常心」「ごくベーシックなバウム」と記しており、枝が短い場合と比べて“適当に描いた”感じが少ない。後にも記すが、枝を伸ばすことには相応のエネルギーが必要であることと関連していると思われる。このように一見同じような形態の簡略画でも、描画時の体験過程は微妙に異なることが示唆される。

また上記の簡略画と近いものとして、分化（分枝）が描かれない場合（#4、#29；図3）や、分枝が一線枝の場合（#31、#49）、幹先端を茂みに隠す形で省略する場合（#11、#43、#56、#61、#67、#97等）がある。これらいずれの場合も、内観やその日の状況として、疲れ・眠気・体調不良を記していることが多い。特に#29（図3）は幹と包冠線が連続した一筆画で描かれており、「めんどくせー」「投げやり」「ちょっと暴力的」な気分で描いたと記録されている。また、茂みで幹先端を覆っているバウムで、側枝を描く等、付加物や変化を加えることが見られるもの（#56、#61、#97等）は、分枝させないことへの補償的感覚があるように思われる。

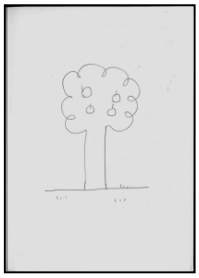


図3　Baum#29

②小さなバウム

#7（図4）、#32、#45、#54、#67等はサイズがか

なり小さいバウム群である。簡略画と重複しているものもあり、両者は労力をかけないという点で共通しているが、簡略画には“適当なごまかし”のニュアンスがあるのに対し、小さな木は単純に“エネルギー水準が落ちて描くだけのパワーがない”という感じが強い。

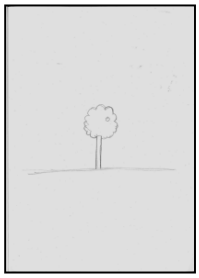


図４　Baum#7

③ヤシの木

#52、#53、#81（図５）の３本が「ヤシの木」である。実際の椰子の木を正確に描いたわけではないが、描画後の記述では「ヤシの木」を意図して描いたことが記してある。そして特に幹先端部分の葉の広がりの描画体験が、#52「発散的」「花火的」、#53「描いて気持ち良い」「開放的」、#81（図５）「ドカーン」「怒りの感情のままに噴出」等と記載されており、ヤシの木類の形態のバウムを描く際には、こういった“感情を放つ感覚”を伴い得ると考えられる。

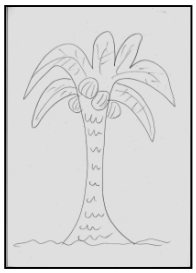


図５　Baum#81

２）繰り返されるテーマ

描画過程に関するメモを分析すると、100枚のバウムを描く上で幾つかのテーマや課題（ある部位を描く際に試行錯誤するようなポイント）があるように思われた。それは直接的には描画表現上の課題であるが、バウムにおける象徴的意味合いとしても、描画過程の体験としても、心理的なテーマに関わる側面を含んでいるように思われる。以下に、今回個人的に感じられた描画上のテーマを記す。

①分化について

先述の簡略画とは対照的に、バウムを描くことにコミットした場合、しばしば逡巡するのが“枝をどのように分化させるか”であった。バウムテスト（描画）への自我関与の高まりと、幹先端の分枝が関係することは、先行研究（佐渡、2016；谷本、2012等）でも示されており、また幹先端処理がバウムの肝要なテーマであって、その処理方法の一つが枝への分化であることは筆者らが指摘している（奥田、2005等）。今回の筆者の体験では、幹をどのように展開させるか迷った時、まず一定の太さで分枝を繰り返す表現をすることが多かった。その一つのパターンが、#1、#8のような、幹先端は扇型で、そこから細かく分枝するという描き方である。ただ、分枝に次ぐ分枝で枝が迷路のように細かくなり（#33；図６等）、枝の先端をどう結ぶか、が難しく感じられた。

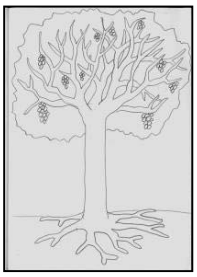


図６　Baum#33

やがて、枝の太さを二線枝のまま維持して管のように展開していくのでなく、先の閉じた二線枝または一線枝を継ぎ足していく（生やしていく）表現（図７）がしっくりくることが体験されてから、その類の分化表現を用いるようになった（#28、#58、#63、#68、#69、#71、#72、#88、等）。その一方で、二線枝のまま、一定の枝の太さを保ちつつ、分化を納得いくように展開することも試み続けていたが、描いた感覚としてはなかなか上手くいかず、入り組んで先が尖ったり（#33；図６、#44）隠したり（#75）、クネクネと分枝したり（#46、#91）、樹冠部が入り組む割に中身がない・バランスの悪いバウムになったという印象が強かった。もし入り組んで分枝をさせるなら、それ相応の幹及びその基部の頑強さが必要であり（#90、#92；図８、#99）、そうでなくば枝の幅を絞って細くするか、樹型を基本形（藤岡ら、1971）にして徐々に分化する形をとるか（#86、#100、等）であった。

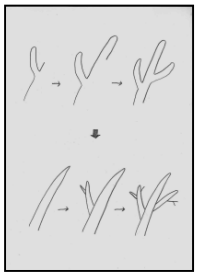


図７　分枝の変化

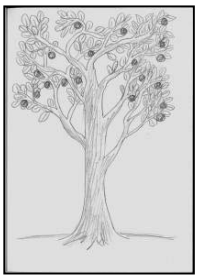


図８　Baum#92

このような分化に関わる描画体験は、ノートに記述された日常の記録との関連で言えば、自分のもっているポテンシャルやエネルギー（使用できる活力）を様々な仕事にどのように配分していくか、という苦慮や迷いの感覚と呼応していたように思われる。

また、ある段階からは包冠線を使うよりも、枝を思うような表現で伸ばし、煩雑でも枝にしっかり葉や実をつけていく方が、バウムの充実感は（描画過程としても、完成した絵としても）高いことが体感された。この点は後に個別のバウムを検討する際にも触れる。

②樹皮（幹の模様）

枝の分枝と連動して、幹の内実感や、枝を展開するに足るような“しっかりした”感じが欲しい時、樹皮（幹の模様）を描いた。また包冠線がないバウムにおいて、かなりの高率で幹の模様が描かれている。描画体験から言えば、包冠による保護感覚が薄い分、幹や

枝という本体の部分の防御性の強さ（防衛というより“表面の堅固さ”）が求められ、描いた感があった。

③根元の処理・表現

根元の表現は、分化ほど多彩ではなく、幾つかのバリエーションに分けられ、地平に沿った／乗った根の表現（資料１では、#1、#6、#8、#9、#12、#13、#18）、地平で切断する表現（資料１では、#7、#11、#16、#20）、地平と連続してやや末広がり気味に描かれる表現（資料１では、#2、#4、#17）の３パターンにほぼ分類される。ただ例外的に、地中の根の広がりを積極的に表現したバウムもあり（#3、#5、#15、#41）、特に#15（図９）は根が主題となっている。#15の描画体験は、「根を伸ばす感じは、やはり枝の分枝とは違う」「開けていく感覚ではない」「“根を張る”感じはそのまま“占める”感もあり、“掘る”、“深みに侵蝕していくような」感覚と記している。

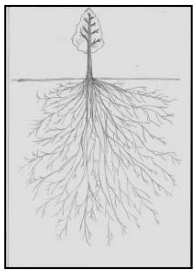


図９　Baum#15

多くの場合、根元を地面に“根付かせる”ために描いても、どこか“しっくり来ない”ことも多かった。根元は本来地中にあって見えない部位であり、しかしながら木を支える重要な部位でもある。根元がしっかりしているバウムは、描画表現としても安定感をもたらす。それらを踏まえると、根をどのように地面に根付かせるかは、幹先端処理と同じく重要な表現ポイントと言えよう。また、しっかりとした根を描いて地面に根付かせるためには、地面自体に根付くに足るような地盤としての固さが求められるように思われる（例えば図10 #28の根と地面）。

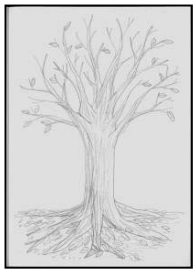


図10　Baum#28

④遠景化・情景化

バウムが遠景化したり、周囲の情景が描かれることが100枚中に時折あった（#9、#16；図11、#25、#32、#45、#59、#67、等）。それらのバウムから伺えるのは、ひとりや孤独の感覚（ただし単にネガティブなものではない、一人でいるからこそ可能な自由さの感覚を含む）、そして「見上げる」“憧れ”感覚であった（#58、#59、#76）。これは筆者の個人的な心理的感覚と繋がっているとも思われるが、遠景・情景化したバウムを描くことは、遠くから眺める客観視や“渦中にいない（蚊帳の外）”あるいは自己疎外的な、いわば“自分をまるで自分自身でないかのように傍から見ている”感覚体験と繋がるのかもしれない。

図11　Baum#16

⑤地平（地面）線の位置

資料１～５をページごとに俯瞰的に眺めていくと、100枚の中の前半は比較的、地平の位置が高いことが見て取れる。記録を見ると、#21のバウム描画後に、「地平がここ最近ずっと上の方だ」と記して、#22で意図して下げている。ところがまた地平が上方に描かれる割合が増え、#68で再度「幹の下を下げてみた」、#71で「どうしても根元が上になる、その分上が詰まる」と記している。描画プロセスから考えると、これはもともとの地平の位置イメージが高いのではなく、バウムを描く時に、まず自分にとってしっくりくる幹の長さがあり、当初はそれを紙面の中心付近に描いていたため、それだと幹の基部が下方まで届かず、相対的に地平の位置が上となり、その後に樹冠部を描くと、上部が窮屈になる（樹冠が収まらない）事態が生じていたと考えられる。資料５に示されている#81以降になると、それが意識されてきたのか、ほとんどのバウムの地面の位置が下の方になっている。

３）個別のバウムおよび内観の検討

次に100枚のバウムの中から幾つかを個別に取り上げ、内観の記述を含めて少し詳しく検討してみる。

①Baum #12（図12）

描画後の記述（内観）では「分枝を意識」した、と記している。そして「分枝させていくのは、ある種の楽しさがある」と感じている。ここでは、どのように伸ばしていこう、という枝の展開の自在さを「楽しさ」と表現している。一方で「“結び”はやはり少し“躊躇”する。やや丸めつつ、尖って収めた。」と記し、先端を閉じる作業に一定の力、意思決定のようなものが要ることを体験していた。また、枝に「葉をつけていくこと」は「飾り感」かつ「生やす感じ（＝分化の延長）」も体験されている。幹から枝へと

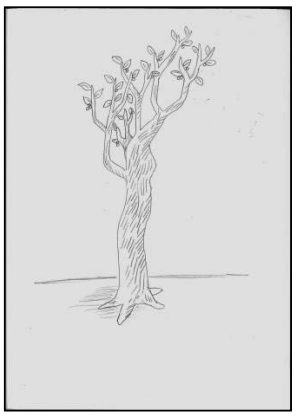


図12　Baum#12

分化した先に葉が生えている表現がなされた時には、葉に（幹エネルギーの）分化感覚が生じているのかもしれない。

#12（図12）は、その外観も、個性的に枝を伸ばした独特な形態のバウムであり、包冠線で境界面を作るのではなく、陰影や樹皮の描写によって、環界からしっかりと個を保ったバウムのあり様が表現できることが、描画体験とバウム双方から感じられた。

②Baum #20（図13）

このバウムは、まず樹冠部（包冠線と実）から描かれた。次に幹、枝、最後に地平を描いた（その後、雲と風を描いて消している）。描画後の記述では「包冠は、外に対して［外界を意識して描いた］という感じはあまりない」と報告している。しかし「領域感（テリトリー作り）はあった」とも述べ、紙面内で“バウムのある場所はここ！”という、個の領域を確保する意識が生じていたと言える。さらに、幹を描くプロセスは「上から降ろしていく感じ」で、地平を描くことで「着地感」「降ろした」「空想→地に足」という体験があったと記している。

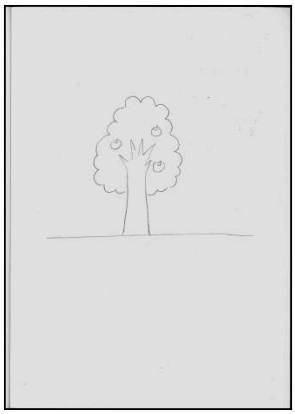


図 13　Baum#20

他にも包冠線からバウムを描いた時（#23、#56、#74、#94、等）には、この「着地感」「幹を降ろす」感覚が顕著に生じていた。バウムを描く時に、樹冠部から描く場合が一定数あるが、その際の描画体験として、幹から地面の描写が上記のような「着地」体験、解釈的に言えば“現実に根を降ろす”意味合いをもたらしやすいのかもしれない。

③Baum #40（図14）

人型のバウムで、幹から描き、側枝を描いてさらに幹を伸ばした後に包冠線で包み、その中に幹先端から４つの分枝と各枝先の包冠線、実を加えて地面、うろとリス、幹の模様を描いた。

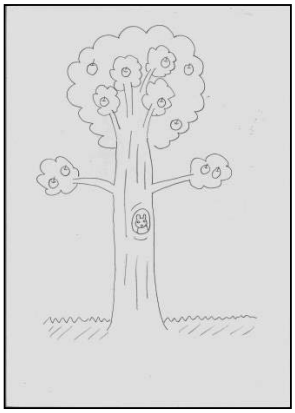


図 14　Baum#40

樹冠内の４つの分枝を「子どもみたい」と記している。うろとリスも「それに引きずられて」「母体じみている」イメージを描画後に感じている。これらは、包んで器となる保護・受容的感覚である。

この描画を行った日は、研究室で長時間ゼミ４回生６名の卒論作業を傍らで見守りつつ指導していたことも記されている。上記のバウムの感覚は、卒論に勤しむゼミ生を研究室という自らの領域に受け入れることと強く繋がっているように思われる。

このように、バウムには最近数日程度のレベルを含む「現状」の感覚が反映されるように思われる。その意味では、セラピー内でバウムテストを実施した場合に、面接あるいは治療関係で賦活されている感覚が表現されることは、十分あり得ると考えられる。

まとめと今後の課題

以上、100 枚のバウム描画体験から考察を行った。これらを一般化することは難しいが、バウムの描画プロセスや体験を理解するための視点を提供するものとして役立つであろう。今後、100 枚のバウムを第３者により客観的に評価する（指標チェックや印象評定）等、さらに分析することを課題として検討したい。

注

１）自らのバウムを大量に公開することはかなりの自己開示的行為と言えるが、バウムの描画体験を素材として考察を行うには、実際のバウムを示すことが肝要と考え、この報告形式をとった。

２）以降に個々のバウムを取り上げて考察するため、幾つかのバウムは重複して図示することになるが、100 枚は継時的に描かれたことから、順に並べて全て示すことの意味合いが大きいと判断した。

引用文献

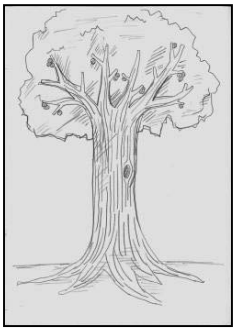
藤岡喜愛・吉川公雄（1971）．人類学的に見たバウムによるイメージの表現．季刊人類学，**2**，3-28.

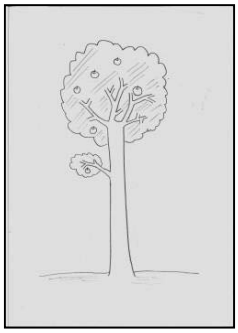
加藤　清・丸井規博（2011）．木景療法―樹木画による力動的治療．創元社.

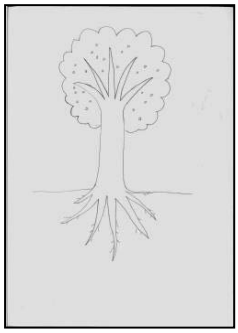
Koch，K.（1957）．*Der Baumtest: der Baumzeichenversuch als psychodiagnostisches Hilfsmittel 3. Auflage.* Bern: Hans Huber.　岸本寛史・中島ナオミ・宮崎忠男（訳）（2010）．バウムテスト［第３版］―心理的見立ての補助手段としてのバウム画研究―．誠信書房.

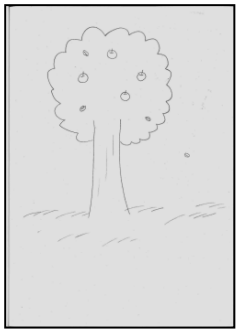
奥田　亮（2005）．本研究のねらい．山中康裕・皆藤

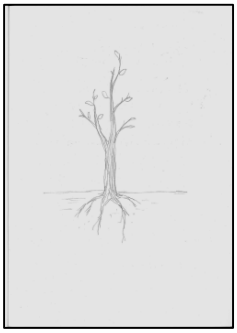
章・角野善宏（編）バウムの心理臨床．創元社，pp.144-151.
佐渡忠洋（2016）．バウムテストの枝と包冠線について．箱庭療法学研究，**29**，67-75.
谷本泰子（2012）．樹木画テストに及ぼす自我関与の影響．臨床描画研究，**27**，137-150.

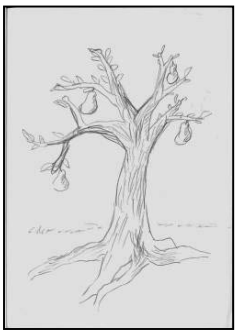

#1

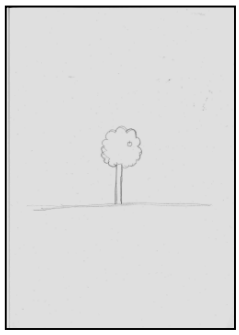

#2

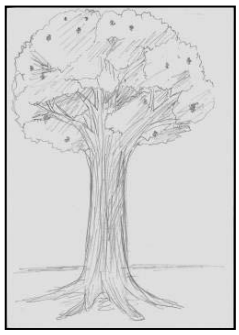

#3

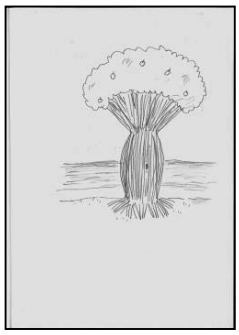

#4

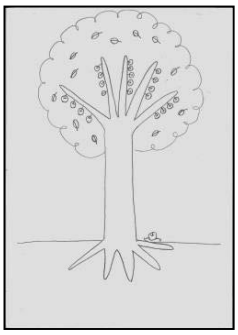

#5

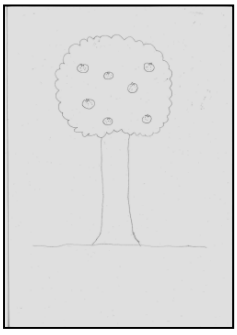

#6

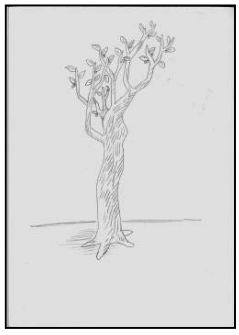

#7

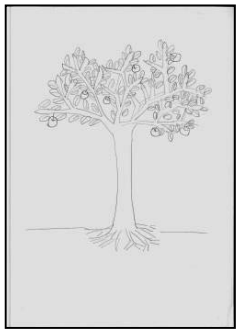

#8

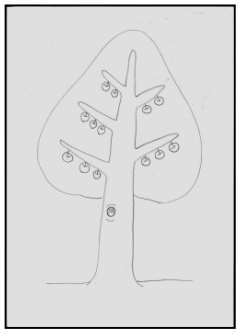

#9

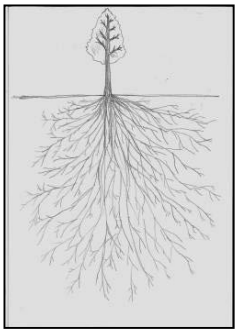

#10


#11

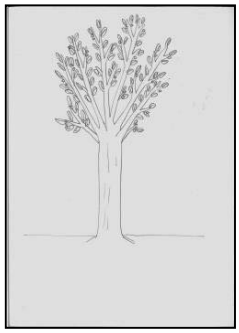

#12

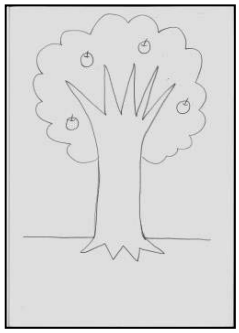

#13


#14

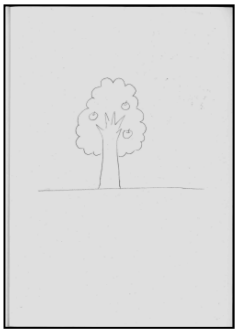

#15

#16

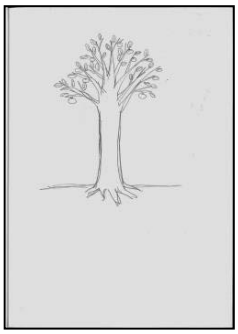

#17

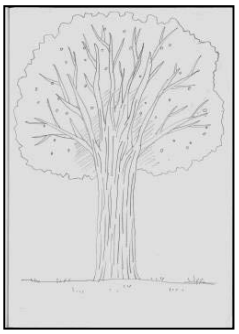

#18

#19

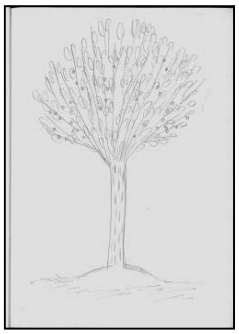

#20

資料１　バウム#1～#20

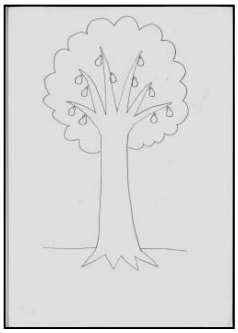

#21


#22

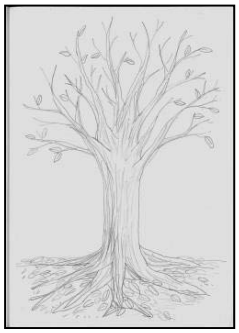
#23

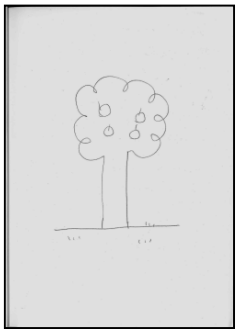

#24

#25

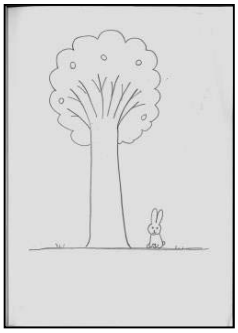

#26

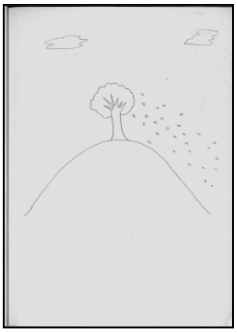
#27

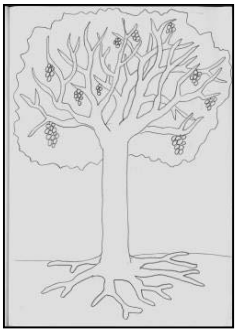

#28

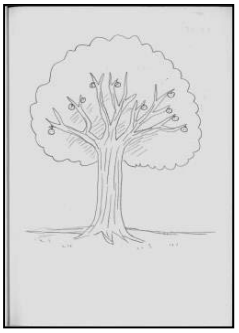

#29

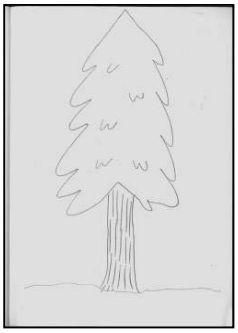
#30

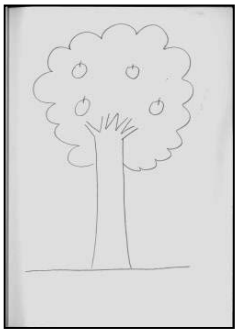

#31

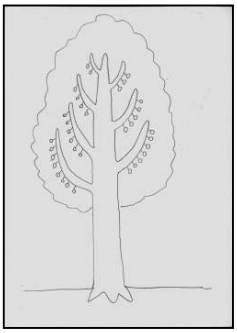

#32

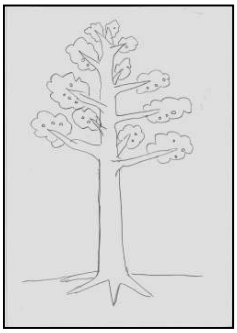

#33

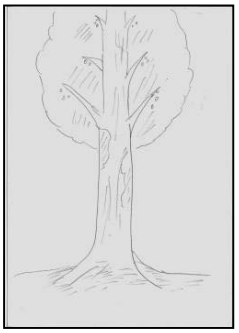

#34

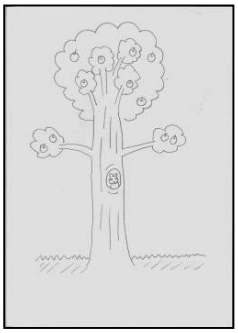

#35


#36

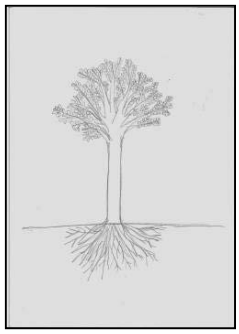

#37

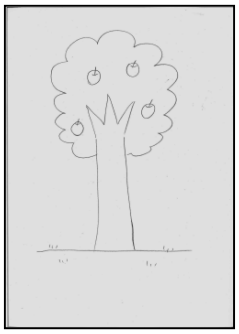

#38

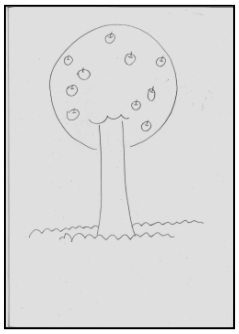

#39

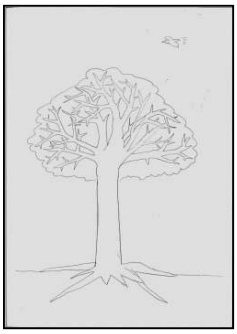

#40

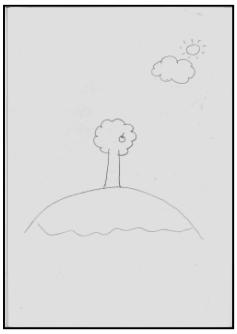
資料２　バウム#21～#40

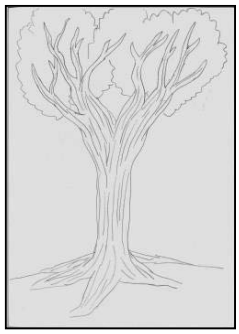

#41

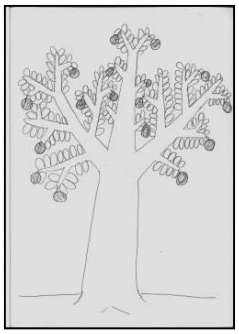

#42

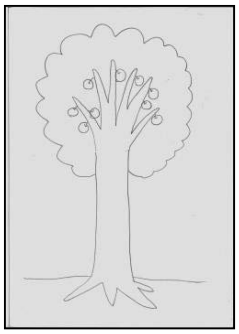

#43

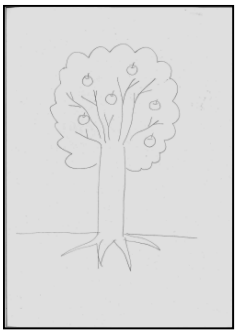

#44

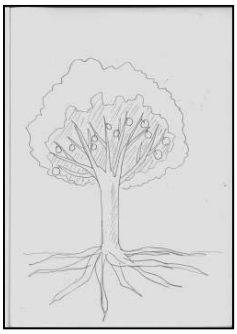

#45


#46

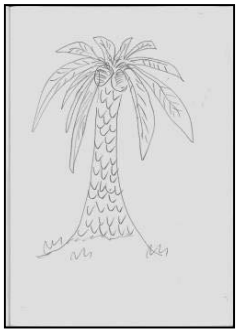

#47


#48

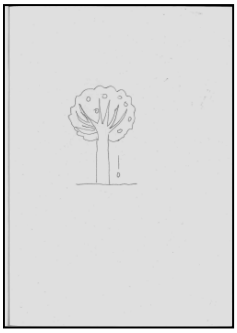

#49


#50

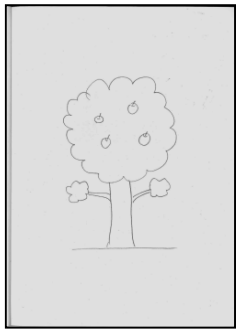
#51


#52

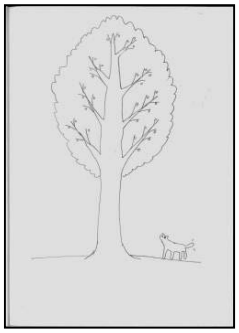
#53

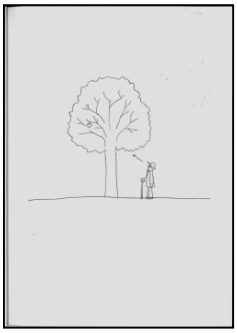

#54

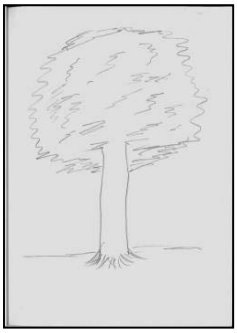
#55


#56

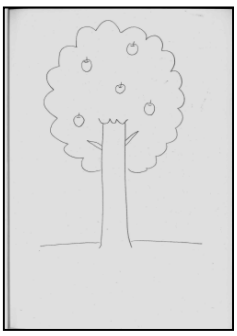
#57

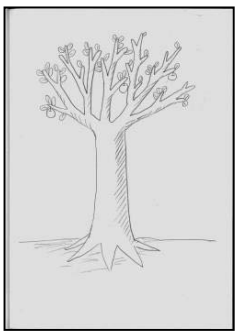

#58

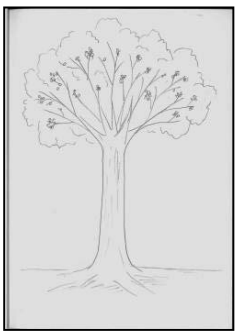

#59

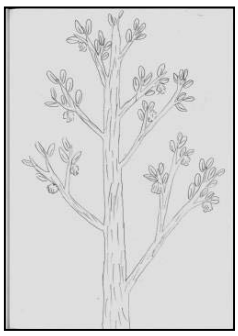

#60

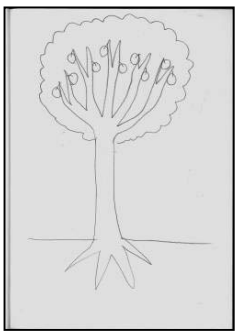
資料３　バウム#41～#60

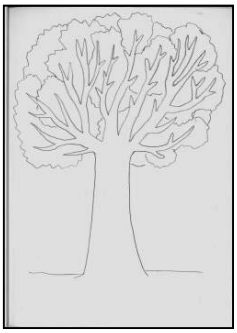

#61

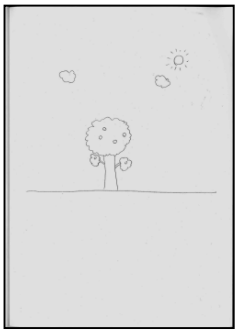

#62

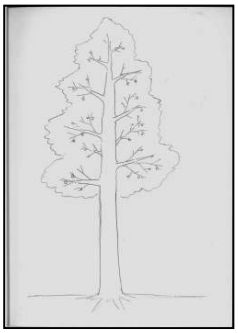

#63

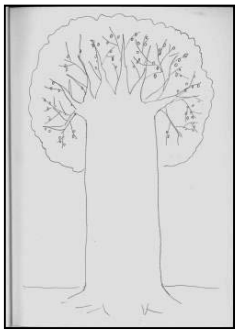

#64

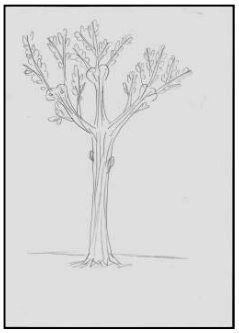

#65

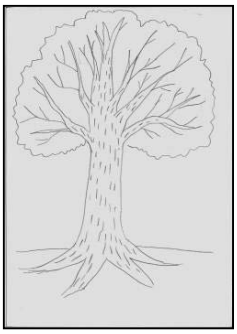

#66

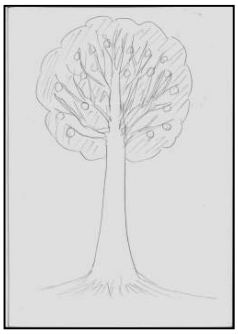

#67

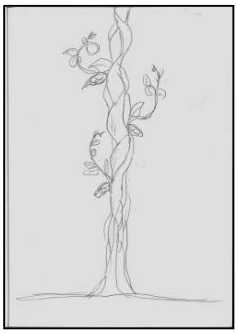

#68

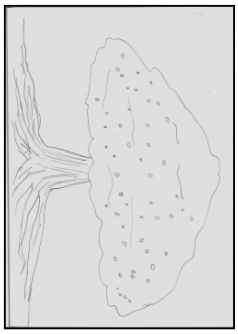

#69

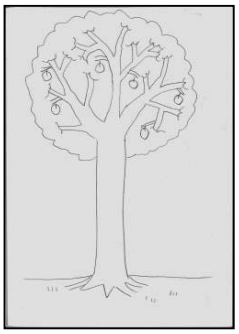

#70

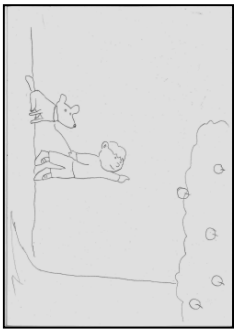

#71

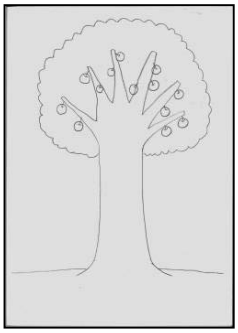

#72

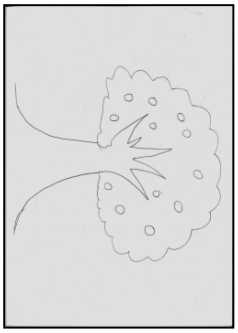

#73

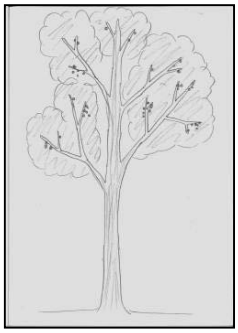

#74

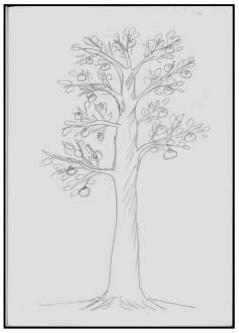

#75


#76

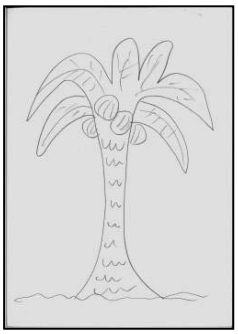

#77


#78


#79

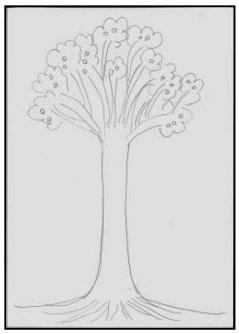

#80

資料４　バウム#61～#80

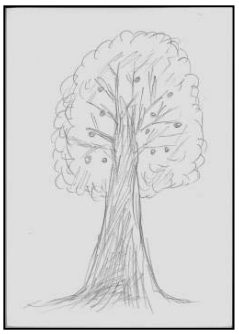


#81

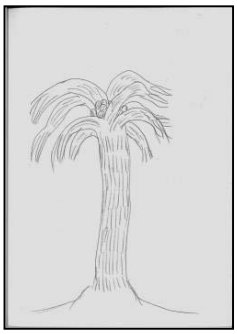
#82



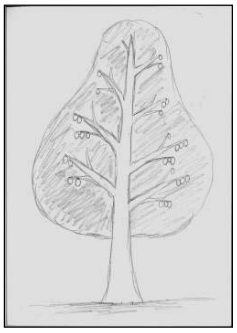
#83



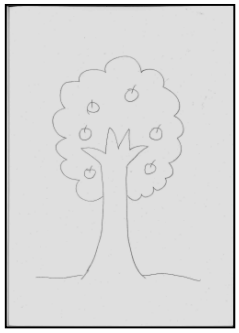
#84



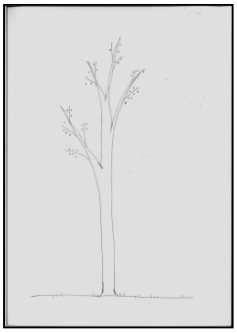
#85



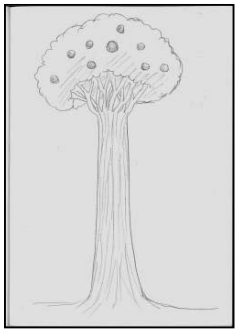
#86



#87

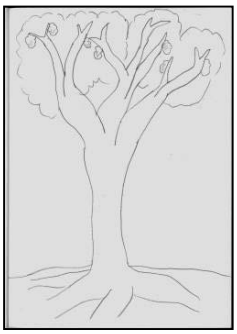


#88

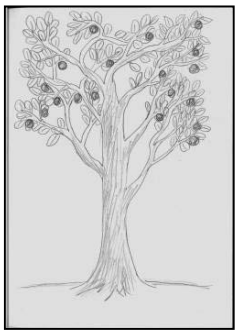


#89

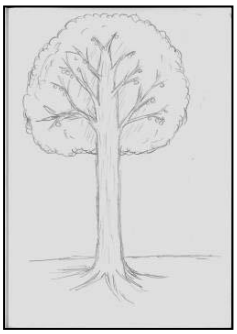
#90



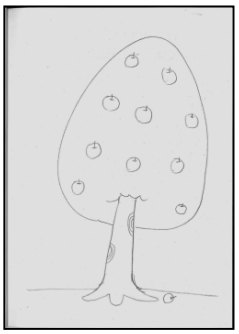
#91



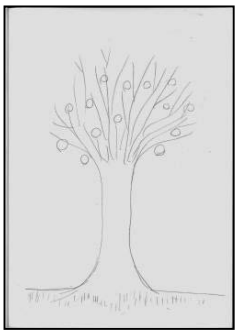
#92



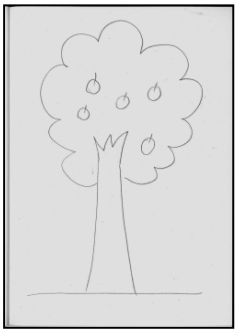
#93



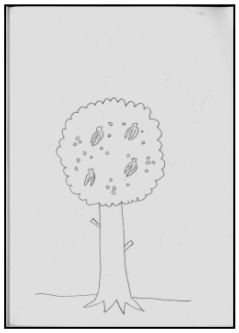
#94



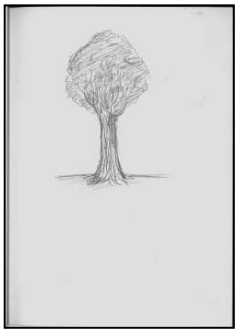
#95



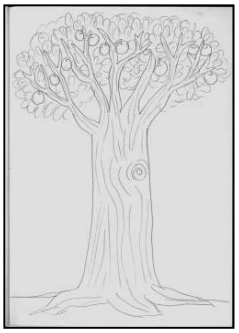
#96



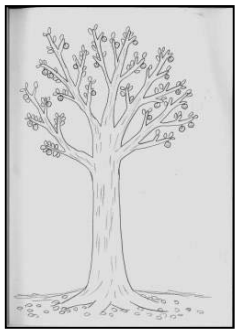
#97



#98



#99



#100

資料５　バウム#81～#100